

## リレー随筆

## 千葉～福岡～鹿児島～指宿～そして離島へ

| 鹿児島医療センター初期研修医 | 中村 崇仁

初めまして、増田先生からバトンを受け取りました、鹿児島医療センター初期研修医2年目の中村崇仁といたします。前々回担当の白石先生から寄稿の話は受けていたのですが、いろいろと時期が重なっていたこと、話すネタが浮かばなかったことなどから申し訳ありませんが見送らせていただきました。さて、白石先生、増田先生とバトンがつながりまして、今回は表題からはわからないかもしれませんが指宿医療センターにて3か月研修を行い、話すネタが溜まったので勉強になったこと、指宿での生活、思い出などつらつらと書き述べていきますのでお付き合いいただければ幸いです。簡単な略歴からお話をさせていただくと、私自身、鹿児島には縁もゆかりもなく高校までは千葉県の柏市という人口40万人程度の地方都市で過ごしました。サッカーに興味のある方には柏レイソルの本拠地といったほうがはやいかもしれません。残念ながらサッカーよりも野球派だったため小学校時代は父親に連れられて東京ドーム、明治神宮、マリンスタジアムなどに観戦に行った記憶が強いですが……。大学は九州大学に進学し、福岡市で学生生活を過ごしました。

6年の夏ごろに鹿児島医療センターに病院見学に行き、博多から鹿児島中央まで駅から駅だけなら1時間40分ほどで到着したので、なんだ、近いじゃんと思ったことは覚えています。交際していた相手が九州大の大学院生でしたので、気軽に帰れるほうが都合がよかったのですね。卒業後にふ



福岡らぼーとのガンダム。  
特に意味はありません。

らふらと鹿児島へやってきたわけですが、病院見学とマッチング試験を除くこの時点では鹿児島にきたのは2回ほどで、九山で1回とコメディカル大会の応援で1回だと記憶しています。また親戚がいるわけでもなくまさに縁もゆかりもない土地にきてしまいました。よく理由を聞かれますが、この手の質問に明確な回答を持つ人は少ないと考えており、私の場合はなんとなくよかったからです。知らない土地に住んでみる理由などそれで十分だと思っています。幸いにして同期の研修医には恵まれており、互いに切磋琢磨し、また愚痴を言い合える友人も見つかったわけですが、1年目

後半から2年目中盤の研修にかけて院外にて研修をする時期が長く、私も1年目3月から2年目10月にかけて院外での研修が続くようなプログラムを組んでいました。さて、長い前置きにはなりましたが2年目の5月から7月にかけて指宿医療センターで3か月研修を行わせていただきました。小児科、産婦人科、消化器内科を1か月ずつローテーションし、どれにおいても指導医の先生には恵まれ楽しい研修ができたのでここにその思い出話など語っていきます。指宿市は人口4万人ほどの市で鹿児島市からは南へ約50kmの薩摩半島南東端に位置し、天然の砂蒸し温泉を観光資源に持ちます。今wikipediaで調べました。砂蒸し風呂には一度だけ記念に行きましたが、熱すぎて速攻で出てしまいました。後で聞いた話によると通は冬に行って限界まで寒さを感じてから蒸すそうです。少し話のレベルが高すぎて自分には理解できませんでしたので、まずは普通のサウナで1分我慢するところから始めたいと思います。砂蒸し風呂に関して特にリベンジの予定はありません。そのほか記憶に強く残っていることはムカデ咬傷を何度か診たことですが、おかげでムカデが夜行性だという知識が増えました。それほど都会で育ったわけではありませんが、人生で一度も生でムカデを見たことがないままムカデ咬傷を診ることになりました。どうやら彼らは家に入ってくるようで、寝返りの際に踏んだりすると攻撃してくるようです。自分の指宿での宿舎は1階でしたが、クモこそ大量に発生していたもののムカデの侵入はおそらく許していませんでした。病院の向かいのニシムタは防虫グッズが異常に充実していたことも一種のカルチャーショックでした。自分が指宿にいた期間は5月から7月でしたので、本格的に夏が始まるにつれて虫も活発性を増し、我慢の限界が近づいていた時に

指宿を去りました。子供の時は大丈夫だったのに気づけば虫や昆虫が触れなくなるのは不思議なものです。



ドイリーのカキグラタン。  
パンに乗せて食べると飛ぶ。

さて、南の生態系について熱く語りましたがせっかくきたのだからといろいろな飲食店をめぐりもしたのですが、病院から国道226号線、通称ニーニーロクを2km弱行ったところにあるビストロドイリーという店のカキグラタンが個人的に一番好きでした。

このためだけにまた指宿に行きたいと思うくらいおいしいのでみなさんもぜひ飛んでくださればと思います。

さて、今この文章を書いている日は奄美大島の県立大島病院にて救急科研修を行っています。8月上旬に台風6号が沖縄、奄美大島付近の海域にて猛威を振るい、こちらにくる飛行機もギリギリで滑り込んだようなタイミングでした。人生で離島にきたのは2度目でして、1度目は卒業旅行で小笠原にきたときでした。自分の卒業時期はまだ例のウイルスの影響により海外旅行が憚られる情勢でしたので、それなら日本で一番行きにくい場所に行こうと部活の同期が言い始めたことがきっかけでした。日本の離島というものは案外多くが空港を持っているもので、大部分の有人島は飛行機で行けるイメージですが、小笠原諸島には空



港がなく、船で24時間かけて行くことになります。繁忙期には定期船の本数は増えますが、それでも最低1週間は必要な行程になります。主な観光資源としてはやはり自然遺産ということになりますが、海の透明度は奄美に勝るとも劣らないと記憶しています。またイルカと泳ぐことができたのも貴重な経験でした。水族館のお姉さんになった気分でした。また大陸と陸続きになった時期が一度もない影響か、植物は固有の種が豊富であり独自の生態系が築かれていたことも興味深かったです。



小笠原にて。RPGに出てきそうな入り江。

幸いにしてこの旅行の時は天気に恵まれ、毎日快晴だった記憶があり、また海も荒れることなく航路も快適だったわけですが、今回奄美にきた際は2日目には台風の影響で物資の補給が停止し、さっそく試練が訪れました。着実に減っていく食料を眺めているのは学生時代の貧困生活を思い出しました。またつい先日ですがハブ咬傷を診ることができたのも、ああ、奄美にきたなあ、といった思いです。ムカデ同様、僕は自分でハブを見たことはありません。動物園で蛇を見たことがあるくらいです。ちなみにハブも夜行性なようです。夜によるよろろごめいていたら失神する自信があります。

長々と自分の来歴について語ってきましたが、どこも住んでみるとその土地なりの

楽しさというのはあるもので、またそこで出会った人々との思い出というのでも増えてきました。最終的に自分がどこに住み着いているかはまだ不明ですが、どこかで何かを楽しくやっていけたらと思っています、と月並みな締めではありますがまとめさせていただきます。

次号は、鹿児島大学病院／前田 拓 先生のご執筆です。  
(編集委員会)

